〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要　Vol. 53　1 ～ 10（2015）〕

保育者養成教育における地域の身近な自然の「あるもの探し」の意義と可能性

矢　島　毅　昌
（保育学科）

A Study on the Importance and Potentiality Regarding a No-name Treasure Hunting in Local Natural and Cultural Resources for Nursery School and Kindergarten Teachers Training Education

Takaaki YAJIMA

キーワード：養成教育　Teacher Training Education
地域資源　Local Natural and Cultural Resources

１．問題の所在

近年の保育では、幼児が家庭や地域において自然と関わる体験が少なくなっていることが課題とされ、保育所・幼稚園で自然と関わる体験を充実させることが大切だと考えられている。自然の減少や外遊びの減少などにより自然と関わる体験や知識が不足しているという状況は、幼児だけでなく保育者を目指す近年の学生にもあてはまることとされている。ただ、体験すべき・知るべき自然の知識とされているのは、学校教育・メディア・環境教育を通じて流布している知識が一般的なものであるが、それらは保育活動で求められる自然の知識と乖離があるように思われる。そのため保育者養成教育では、両者の乖離を念頭に置いた上で、保育者を目指す学生に向けた自然の知識を提示することが必要になるだろう。そこで本稿では、自然の知識のあり方に見られる課題を整理したうえで、保育者養成教育のための自然の知識のあり方について考察したい。

２．自然の知識のあり方とその課題

１）保育・幼児教育／学校教育と自然の知識

幼児が保育所・幼稚園で自然と関わる体験を充実させるために、どのようなことが目指されているのだろうか。現在の『幼稚園教育要領解説』の「地域の資源を活用し、幼児の心を揺り動かすような豊かな体験が得られる機会を積極的に設けていく必要がある」（文部科学省編 2008, p.218）という考え方や、『保育所保育指針解説書』の「保育士等は、園庭の自然環境を整備したり、散歩に出かけて自然と触れ合う機会を作ったりして、身近な動植物や自然事象に子どもが接する機会を多く持つようにしていくことが大切です。また、保育士等自身が感性を豊かに持ち、自然の素晴らしさに感動することや、子どもの気付きに共鳴していくことが求められます」（厚生労働省編 2008, p.83）という考え方からは、地域の身近な自然を積極的に活用すること、保育者が自然に対する感性を豊かに持つことが目指されていると言える。これらは要領・指針レベルの話であり、

実態については別途考察が必要であることを留保しなければならないが、保育活動で求められる自然の知識のあり方の原則である。

では、就学後の教育ではどうだろうか。自然の知識は、主に自然科学系の教科で長期的に学べるようになっているが、自然の知識を学校教育で学ぶ知識との関連で考えるとき、岩崎正弥の指摘する問題点は重要である。岩崎は日本の学校教育を「いわば〈地元を捨てさせる教育〉だったのではないか」（岩崎・高野 2010, p.21）と指摘し、以下のように問題点を述べている。

> 私は大学２年生科目として「調査法」という授業の中で、街なかアンケートや農村でのヒアリング、地域住民を交えたワークショップなどを実施しているが、学生によくいわれる。「先生、こんなの小学校以来初めてです」と。奇妙なことに、地元を考えることは特殊な事情がない限り小学校までで、その先は中学・高校を素通りしていきなり大学にまで飛んでしまう。郷土学習はあくまでも小学校・中学年における、より高度な思考を養うためのとっかかりの位置づけしか与えられていないのである。
>
> （岩崎・高野 2010, p.25）

保育者養成教育を受ける学生にとって、養成校入学以前に学んだ自然の知識の多くは、地域の身近な自然の知識ではないと想定することが必要であると言えよう。この状況は、イリイチ（Illich）が問題提起した「地域の人びととの生活や、環境資源を自分たち自身の手で用いたり、営んだりできないという、現代に特徴的な無能力は、生活のあらゆる面をむしばみ、文化的に形成されてきた使用＝価値〔ものの使用そのものに備わっている価値〕に代わって専門家のつくりだす商品が、生活のあらゆる面で幅をきかせる」（Illich訳書 1999, p.56）状況に類似しており、注意を要するだろう。

２）社会に広がるノスタルジックな自然の知識

一般に流布している自然の知識は、学校で学ぶものばかりではなく、メディアを通じて社会に広められたものも多いが、それもまた地域の身近な自然に対する豊かな感性とは隔たりのあるものになっていることが少なくない。

たとえば、保育活動では、自然と関わる活動の一つとして、農業体験が各地で実践されている。しかし農業については、その外部の人たちによる「環境を守り維持するための農村」や「都会の人たちの憩いの場」（森 2004, p.53）というノスタルジックなイメージでの語りが社会に流通している側面もある。

岩本通弥は、棚田百景など都会人の眼で選び取られ審美的に組み替えられた田舎の美しさを例に、次のように述べる。

> 生活文化体系という本来の文脈から、断片的な文化要素が切り離され、二次的に審美的に再文脈化されるのは、あくまで都市民の望みイメージする表象であって、それは必ずしも本物である必要はない。むしろ本物よりも、より本物らしい伝統らしさや地方らしさが希求される。「まがいもの」でも「らしさ」の方が重要なのが、現代のメディア社会の現実であって、都市民の中で構築されたリアリティによって、現実の方が再編される。
>
> （岩本 2006, p.26）

岩本の表現を借りれば「農村は景観化した」（岩本 2006, p.18）のであるが、このような現象は最近になってから生じたものではない。すでに柳田國男が『都市と農村』（1929年刊）において、都市の住民が田舎に対して「村の生活の安らかさ、清さ楽しさに向かっての讃歎」と「辛苦と窮乏又寂寞無聊に対する思い遣り」の二つの考え方を持っていること、そして「都市の人々が尚自分たちの爲に、出来るだけ明るく美しい田舎を、描いて見ようとして居た」ことを「帰去来情緒」という語で指摘していた。その背景にあるのは、柳田によれば「村を出て来た者の初期の町居住の心細さが、こういう形をとって永く伝わったもの」（柳田 1969, pp.286-287）である[1)]。つまり、実際に村を出て来た世代だけでなく、最初

から町に居住していた世代であっても、「明るく美しい田舎」を思い描いていたことが窺える。

そして現在では、人々が「明るく美しい田舎」を思い描く際に参照する知識が、メディアを通じて社会に広められている。「人々が民俗文化的要素を『流用』し、表面的部分のみを保存する『書き割り的』な演出や、伝統らしさを自ら振る舞うことで、都会から訪れた観光客などのノスタルジーや欲望を満たすような状況や現象」であるフォークロリズム（岩本 2006, p.24）が産出するイメージは、人々の「自然＝身近ではないもの」という認識を強める知識だと言えるだろう[2)]。

3）環境教育と地域の身近な自然の知識

他方で、自然の知識として近年ますます重要性を高めているのは、環境教育で教えられる知識である。自然環境の汚染や破壊が絶えず進行する状況の中、環境教育を子どもが低年齢のうちから実施することも盛んになっている。

しかし、アメリカの環境教育の研究者・推進者であるソベル（Sobel）は、環境教育で教えられる自然の知識の多くが身近な場所と切り離されていることを問題提起している。「子どもたちはドアの向こうのごく身近な外の世界と切り離されている一方、地球上の絶滅危惧生物や生態系とは電子メディアによってつながれている」ことや、「学校で熱帯雨林については教育されるのに、身近な北米の広葉樹林については教えられない。教室のドアのすぐ向こうにある草ぼうぼうの原っぱについてさえも教えられていない」（Sobel訳書 2009, p.10）ことが、ソベルの批判する環境教育の例である。環境教育で学ぶ自然の知識がこのようになってしまう理由は、ソベルによると、学校の教育カリキュラムの観点では地元の自然よりも熱帯雨林の方がまとまりが良く扱いやすいためである。「熱帯雨林について学習するには、安全な教室のなかで、珍しい、すてきな動物の写真を眺め、ダンボールで熱帯雨林のミニチュア模型を作っていればいいのである」（Sobel訳書 2009, p.12）というソベルの指摘は手厳しいが、一般に流布している体験すべき・知るべき自然の知識のあり方を端的に物語っている。日本で自然の知識や身近な自然との関わり方を再考する際にも、この指摘から学ぶことは少なくないだろう。

なお、日本で就学前の保育・幼児教育に環境教育を導入しようとする立場からは、自然環境を有限性・多様性・循環性をもつ存在として捉える生態学的な視点が保育現場には不十分であることが批判されている。井上美智子は、幼児期から「持続可能な社会形成につながる環境観を形成する」には、従来からの保育実践で重視されてきた「身近な自然と触れ合い、感性の育ちを重視する内容」（井上 2009, p.103）では、環境教育としての新たな課題性がない保育実践になってしまうことを批判している。そして井上は、自身が考える幼児期の環境教育を「幼児期の発達理解を元に、子どもの主体的な遊びを重視しながら、持続可能な社会形成につながる環境観を形成する営み」と定義し、同時に「ここでいう環境とは『自己（人間）を取り巻く外界（自然〜人〜生活）』であり、その場合の自然は『人間がその一部であり、人間の生存の基盤をなす存在であり、有限性・多様性・循環性をもつ存在』を意味する」と定義して、その観点から保育の実態の不十分さを批判している（井上 2009, p.104）。ただし井上の主張は、幼児教育に「持続可能な社会形成につながる環境観を形成する」環境教育を導入する必要性・重要性を示すことに特化したものである。そこにはソベルのような、環境教育が抱える問題を踏まえて幼児の発達段階に相応しい環境教育の内容を問い直す発想は見られない。

もちろん、高度な普遍的・抽象的知識を学習することにより、それらの知識を用いた身近な事象の考察がより発展することもあるだろう。それは非常に大切なことではあるが、他方で、それらの知識が「身近な事象に関する知識は体験すべき・知るべき知識として優先順位が低い」という認識にもつながっていないか、留意する必要がある。

3．自然の知識との新たな関係性を創造する保育者養成教育に向けて

1）人と自然との新たな関係性を創造することの重

要性

近年は、自然教育園建設など子どもを取り巻く自然環境が積極的に整備されつつあるが、必ずしも自然度が豊富な原生原野や教育的配慮のもとに整備された公園ではなく、貧相な草やぶであっても、子どもの感性や情緒を育むうえで重要な環境になることを示した研究もある（山崎 2007）。また、ソベルは環境教育の問題を踏まえて「Place-based Education」を提唱し、身近な場所に根差した教育の重要性を主張している（Sobel 2008）。地域の身近な自然は、必ずしも豊かとは言えない自然であるかもしれないが、それは保育者養成教育および保育者の職務では重要な存在である。地域の身近な自然を活かすためには、それも体験すべき・知るべき自然であることを積極的に意識できるような発想への転換を促す枠組みが必要であるだろう。

その枠組みを考える際、廿日出里美による、保育者養成教育の課題への対応として新たな学習活動を導入する研究の知見は示唆に富んでいる。廿日出の研究では、子ども／利用者、教員／専門スタッフ、保護者／家族、地域住民らの共同体の中で日常が営まれる学校／施設という場では、役割関係が固定化されるという問題があり、そこで保育者養成教育の授業科目にアーティストがゲスト講師として関わり、すでにある共同体に新たな関係性を創造することで、大きな学びにつながったことが示されている（廿日出 2011, pp.80-81）。共同体において、人との役割関係だけでなく、物や知識との役割関係――この場合は、学生と体験すべき・知るべき自然の知識との役割関係――も固定化されていると考えるならば、そこへ地域の身近な自然の知識との「新たな関係性を創造すること」が可能になるような枠組みを導入することが、保育者養成教育に必要なのではないだろうか。

ある保育者養成教育用のテキストには「自然環境がただ存在するのではなく、そのなかでの出会いを意味のあるものにしていく人（家族・先生・友達・地域の人など）が重要な役割を果たしてこそ、自然環境が子どもにとって身近なものになる」（柴崎・若月 2009, p.48）という記載が見られるが、これは子どもに限らず「出会いを意味のあるものにしていく」という「新たな関係性を創造すること」の重要性を示す一例だと言えるだろう。

２）人と自然との新たな関係性を創造するための視点

ここで自然の知識を関係性で捉えようとする時、ユクスキュル（Uexküll）の「環世界」（Uexküll / Kriszat訳書 2005）のような、動物はそれぞれの種に特有の関係で自然界の環境と結びついているという固定的な関係を想定しているわけではない。バーガー（Berger）とルックマン（Luckmann）は、人と環境との関係をそのような関係と対比させ、「人間には種に固有の環境、つまり人間自身の本能的構造によって厳密に構成された環境、などといったものは存在しない」（Berger &Luckmann訳書 2003, p.74）ことを、以下のように述べている。

> 人間は…中略…周りの環境に対するその関係も、地球上のどこにおいても、人間自身の生物学的構造によっては極めて不完全にしか構成されていないのである。この後者の条件は、いうまでもなく、人間がさまざまな活動を行うことを可能にする。
>
> （Berger &Luckmann訳書 2003, p.75）

人と自然環境との関係や、そこから生じる人にとっての自然の知識は、ひとたび構成されると固定化するのではなく、常に再構成の可能性に開かれているとすれば、目的に応じて再構成していくことも大切になるだろう。

それでは、地域の身近な自然環境と新たな関係性を創造し、体験すべき・知るべき自然の知識を再構成するために、具体的にはどのような発想の転換が必要になるだろうか。一つの手掛かりとなるのは「地元学」の知見である。「地元学」を提唱する吉本哲郎は、「アイデンティティ閉塞症」という言葉で「ヨーロッパの美しい農村風景や人の話に、かぶれたりすべてを拒否したりするという過剰な反応」「自分や地域を知らないからおきる過剰な反応」「自分や地

域に自信がないことからおきる極端な反応」を問題視する（吉本 2008, pp.30-31）。このような問題意識に立つ吉本が説いているのは、「ここには何もない」と言わない「あるもの探し」や「価値創造型」の地域づくりの重要性である（吉本 2008, pp. 6 -13）。ノスタルジックなイメージが強調された自然、地元を捨ててより「高度」な思考を養うための素材となる自然、世界的な関心を集める保護されるべき自然、原生原野の豊富な自然、教育的配慮のもとに整備された自然等々、このように人にとっての自然の役割が固定化されているとしたら、地域の身近な自然の「あるもの探し」を通じて人と自然との新たな関係性を創造することが、保育者養成教育における一つのねらいとなるだろう。

４．事例：自然の知識を再構成する試み

１）地域の身近な自然の「あるもの探し」の実践

ここで実際に、地域の身近な自然の「あるもの探し」を実践してみたい。事例の撮影地は、筆者の勤務地である島根県内に存在する、学校・保育所・児童公園に囲まれた住宅街の一角にある200m程度の通りである。



写真１

この通りには名前が付けられ、植物と岩だけでなく休憩所も整備されている（写真１，２）。とはいえ、自然度が豊富な原生原野や教育的配慮のもとに整備された公園と比べれば多くの動植物が集まる場所ではない。あくまで街中の「通り」であり、何となく



写真２

通り過ぎれば「ここには何もない」と感じるかもしれない。しかし、実際に歩いてみると、以下に挙げるように様々な「あるもの探し」が可能である。



写真３



写真４

通りの近くには川がある（写真３）ため、一部に水路が見えるようになっている（写真４）。

この水路の脇には階段が設置されており、水面近

くまで降りていくこともできる。降りた先には飛び石も設置され、この場所が水に親しむ場として設計されたことが窺える（写真５）。高低差による変化のある地形、自然物と人工物との組み合わせが、ここでは特徴的である。水路を流れる水の透明度は低く独特のにおいもある（写真６）ため、気軽に水の中に入ることは難しく、飛び石をわたる際にも気を使うことになるだろう。しかし、この特徴は、環境保全や生態系への関心につなげる際には、より積極的に注目される特徴になるだろう。



写真５



写真６

なお、高低差のある地形は、少し離れた場所に緩やかなものがもう一つあるが、こちらは一端が緩やかな斜面、もう一端が階段になっており（写真７）、



写真７

さらなる変化をつくりだしている。

また、この通りには、舗装された２本の道路に挟まれる形で､大きな木と岩が並ぶ細長の緑地がある。この緑地には、まるで歩道のように土が剥き出しになった部分がある（写真８，９）。



写真８



写真９

芝の生え方・残り方から察するに、この上を何度も人が通ることによって道ができたのであろう。緑地に置かれた岩の高さはガードレールより少し低い

程度であり、手を触れる、腰掛ける、乗るなどの関わりが容易な高さである。人が足を運びたくなる自然とは、必ずしも自然度の豊富さや教育的配慮ばかりで決まるわけではないと言えるのではないだろうか。

2）考察

今回「あるもの探し」を実践した通りには、親水整備、地形の高低の変化、坂と階段による異なった斜面の舗装、身体との関係により意味や機能がつくられる自然物などが見られた。それらは、原生原野のように自然度が豊富なもの、あるいは教育的配慮のもとに整備されたものではない。しかし「ここには何もない」わけでもない。「あるもの探し」や「価値創造型」の地域づくりにより、ここに体験すべき・知るべき自然の知識が構成される。

バーガーとルックマンは「疎遠な領域に対する私の関心は、近しい領域に対するそれほど強くはなく、緊急性にも乏しいにちがいない」（Berger &Luckmann訳書 2003, p.32）と述べていた。この感覚を本稿の問題関心に即して具体化するならば、環境教育のあり方、〈地元を捨てさせる教育〉、「ここには何もない」という意識などが、地域の身近な自然への関心を弱め、それらを「疎遠な領域」にしてしまっていると言えるだろう。「あるもの探し」とは、地域の身近な自然を「近しい領域」にして関心を強めることを目指す試みなのである。

5．まとめと今後の課題

1）保育者養成教育における「あるもの探し」の意義

本稿は「教育社会学は、子どもが対象となるサービスや職業人に求められる『知』の再構成にどう貢献できるのか」（廿日出 2011, p.66）を示す、一つの試みである。保育者養成教育で必要な自然の知識とは、豊かさや貴重さに偏りがちな自然の知識と同種のものばかりではない。むしろ、地域の身近な自然への関心を促すような自然の知識が、ここでは必要である。その知識は、保育者を目指す学生と自然との新たな関係性を創造し、学生の「知」の再構成に貢献するものとなるだろう。

保育所や学校の身近にある自然の知識は、保育・教育の実践者およびそれを目指す学生にとって必要なものであり、「あるもの探し」のような「価値創造型」の試みを経験することは重要であると考えられる。より実践的な保育者養成教育のためには、学生自身が「あるもの探し」を実践できる経験の場を設けることが望ましく、その具体化は今後の課題である。

念のために付記しておくと、ここでの論点は「知識か経験か」という素朴な二項対立の図式ではない。そもそも私たちは、シュッツ（Schutz）が述べるように、自分の経験に先行する経験に基づく知識を抜きにして何かを経験することはできない。

> この世界は、われわれが生まれる以前から存在している世界である。すなわちこの世界は、われわれの先行者である他者たちによって、すでに組織された世界として経験され解釈された世界である。今やこの世界は、われわれの経験と解釈にとっては所与のものである。この世界についての解釈はすべて、この世界に対して以前なされた経験の集積に基づいて行なわれる。ここで以前なされた経験とは、自分自身の経験であったり、あるいは両親や先生からわれわれに伝えられた経験であったりする。そしてそれら諸々の経験が、「利用可能な知識」という形態をとることによって、〔世界を解釈する際の〕準拠図式として機能するのである。
>
> （Schutz訳書 1983, pp.53-54）

教員側から「あるもの探し」の事例を知識として提示することには、人数や授業時間等の制約で校外学習が難しい場合（特に短大では制約が大きい）の対応や「あるもの探し」に向けた事前学習の域を越えた、世界についての理解を深める学びとしても一定の意義があると言えるだろう。

「ここには何もない」という意識は、地域の身近な自然への関心を削いでしまう。保育者養成教育のように地域社会へのまなざしが必要とされる教育で

は、「アイデンティティ閉塞症」に陥らないためにも、身近な場所に根差した教育がいっそう重要となるのではないだろうか。

２）地域志向の若者を描く研究動向から見える課題

もう一つの大きな課題として、近年の地域研究が産出する「地域に関するネガティブな知識」とどのように向き合うのか、ということを挙げておきたい。

長期化する経済不況や少子高齢化が深刻となる中、地域の疲弊、Ｕターン就職や地元進学志向の高まり、経済成長時代とは異なる地域活性化の試みなどを背景に、経済・社会・教育などの研究で「地域」への関心が高まっている。しかし以下に見るように、地域志向の若者が「こもる」「下流」「ヤンキー」「上昇（≒上京）志向を持たない層」などのネガティブな言葉で語られていること、しかも、これらの言葉が新たな社会現象を説明するカテゴリーとして引用されながら影響力を強めていることには、これから十分な注意が必要であると思われる。

一例を挙げると、阿部真大（2013）は、岡山県在住の「地方にこもる若者たち」44名の調査をもとに、地方の若者の労働環境の厳しさ、仕事に対する満足度の低さ、収入の低さ、悲観的な未来の見通し、親の収入に寄生した生き方などについて論じている（pp.66-68）。ただし、調査対象者の大半の職業が非熟練の低賃金サービス労働者であり、しかも44名の調査対象者が選ばれた経緯や基準については明記されていない。にもかかわらず、この44名のデータを一般化して地方の若者を論じようとする態度が色濃く表れており、このような姿が地域を志向する若者の実態として独り歩きしかねない記述になっている。

もう一例を挙げてみたい。原田曜平（2014）は「かつていわゆる下流[3]の若者に多くいたはずの典型的なヤンキー」が今は「やさしくマイルド」になっているとする認識をもとに、今のヤンキーを「残存ヤンキー」と「地元族」の２タイプに分類して、後者の若者を「マイルドヤンキー」と名付けた（pp.18-23）。それは元ヤンキーすなわち実際にかつては典型的なヤンキーだった若者とは異なる存在であることに注意したい。

原田の説明では、「マイルドヤンキー」は「上『京』志向がなく、地元で強固な人間関係と生活基盤を構築し、地元から出たがらない若者たち」（p.25）とされており、この説明を見ると、必ずしもヤンキーだけにあてはまるとは限らない若者たちの姿である。そのことは「人間関係が狭く、中学校時代などの少人数の地元友達とつるむ、といった点は昔のヤンキーと同じですが、ぱっと見では、今どきの普通の若者と大差がありません。地元のファミレスや居酒屋や仲間の家でダラダラ過ごすのが大好きです」（p.20）、「ここで言う地元とは、生まれ育った地域のことです。県単位・市単位のように広いエリアではなく、５km四方の小中学校の学区程度を想像してください。…中略…地元＝地方とは限りません」（pp.21-22）という説明を見ると、ますます顕著になる。むしろ原田の説明によって、かつての典型的なヤンキーには含まれることのなかった地元＝身近な地域を志向する若者にまで「マイルドヤンキー」というカテゴリーが適用され、そのカテゴリーが含意する「下流」というカテゴリーも適用される下地がつくられてしまうと言えるのではないか[4]。

サックス（Sacks）の説明に詳しいように、人はカテゴリーを通して理解されるものであり、またカテゴリーにはそれがいかなる存在であるかという知識が結びついている。私たちは、どのカテゴリー（たとえば「地域志向が強い若者」「マイルドヤンキー」などに限らず「非熟練労働者」「低学歴」などあらゆるカテゴリー）についても豊富な知識を持っている。また、どのメンバーもこうしたカテゴリーのどれかを代表するものとして見られ、あるカテゴリーにあてはまる人は誰でもそのカテゴリーの一人のメンバーとして見られる。そのため、もしある人が○○をしたなら、そうした出来事は特定の個人△△がしたのではなく、△△に適用可能なカテゴリー××のメンバーが○○をしたのだと見られることになる（Sacks訳書 1987, pp.33-34）。そのため「マイルドヤンキー」のような、地元＝身近な地域を志向する若者を「下流」と見做すようなカテゴリーにより、身近な地域に関わる知識とそれを大切にする若者が奇

異な存在として理解される危険性がある。

他方で阿部と原田の研究には、身近な地域の自然の「あるもの探し」について考えていく際の重要な指摘も存在する。それは、両者の研究において、地方に住む若者たちが「地元の好きなところ」として全国チェーンの商業施設を挙げる一方で、一般に地域資源として考えられるような光景をほとんど挙げていないことである（阿部 2013, pp.84-87、原田 2014, pp.40-42）。もちろん、全国チェーンの商業施設を好むことが悪いわけではないが、そこには「あるもの探し」のような「価値創造型」の試みとの相当な温度差が感じられる。

身近な地域に対する「ここには何もない」という意識と、地域にあるものとして全国チェーンの商業施設を挙げる意識のあり方へ向けて、身近な地域の自然を志向する教育がどのようにアプローチが可能かということについては、今後の理論的・実践的な課題としたい。

〈付記〉

本稿は、科学研究費補助金（若手研究(B)）「地域の自然と児童文化財を活用した保育者養成プログラムの原理と方法に関する研究」（課題番号：26870803, 研究代表者：矢島毅昌）による研究成果の一部である。

注

1）引用に際し、旧かなづかいは現代かなづかいに、旧字体は新字体に、適宜改めた。

2）近年、従来の大量移動・大量消費型の観光に代わるエコツーリズム、グリーンツーリズム、ソフトツーリズムなどが注目されているが、そこでは漁業・農業・林業がその景観も含めて「環境」「自然」「伝統」という言葉で装飾されて観光資源化されている（森田 2006, pp.203-204）。この手法は地域にとって、物産店や娯楽施設を次々と新設する観光地化に比べ、地域の生活に即した持続可能な観光地化であると考えられているが、「環境」「自然」「伝統」という言葉により強調・美化された地域の一断片が知識として流通する契機になるとも言えるだろう。

3）「下流」とは、原田も同書の注釈で説明しているように、三浦展の造語である。三浦によれば、「下流」とは単に所得が低いということではなく、コミュニケーション能力、生活能力、働く意欲、学ぶ意欲、消費意欲など、総じて人生への意欲が低い（三浦 2005, p. 7）階層を指している。ただし三浦や原田の言う「下流」は、従来の実証的な階層研究の成果を参考にしてはいるものの、それを踏まえた概念というよりは、従来のマーケティング業界が主たる対象としなかった層（その層には地方在住者も含まれる）に名付けた概念というニュアンスが色濃く出ている点に注意したい。

4）もちろん、地域で暮らす若者が、地元で強固な人間関係と生活基盤を構築している者ばかりでないことにも注意を要する。その一例として上間陽子の研究（2014）が挙げられる。上間は沖縄の若者を対象とした研究において、慢性的な雇用不安を抱えながらも沖縄に暮らす若者は「ゆいまーる」と呼ばれる相互扶助の精神と地元地域に根ざした人間関係と地域活動の存在によって孤立が食い止められているとされてきたが、実はその地域活動の多くは男性を中心にしたものであり、非正規雇用や失業中の男性を包摂しても女性を包摂することはなく、むしろ地元地域が女性たちを監視し否定的サンクションを与えるものとして存在し続けていることを指摘している。なお、本稿の関心である地域の身近な自然の知識についても、知識や興味の差が男女間で異なる可能性があり、それは保育者養成教育のあり方を考えるうえで重要な視点になる。今後の課題としたい。

参考文献

阿部真大, 2013,『地方にこもる若者たち：都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版。

Berger, Peter L. and Luckmann, Thomas, 1966, The social construction of reality: a treatise in the sociology of knowledge, Anchor Books.,（＝2003, 山口節郎訳『現実の社会的構成：知識社会学論考』新曜社）.

原田曜平, 2014,『ヤンキー経済：消費の主役・新保守層の正体』幻冬舎。

廿日出里美, 2011,「保育者養成という現場の日常：人々を実践に向かわせる知の再構成」『教育社会学研究』88, pp.65-86.

Illich, Ivan, 桜井直文監訳, 1999,『生きる思想：反＝教育／技術／生命』〔新版〕藤原書店。

井上美智子, 2009,「幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題」『環境教育』19-1, pp.95-108.

岩本通弥, 2006,「都市憧憬とフォークロリズム：総説」新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学 1 都市とふるさと』吉川弘文館, pp.1-34.

岩崎正弥・高野孝子, 2010,『場の教育：「土地に根ざす学び」の水脈』農文協。

厚生労働省編, 2008,『保育所保育指針解説書』フレーベル館。

三浦展, 2005,『下流社会：新たな階層集団の出現』光文社。

文部科学省編, 2008,『幼稚園教育要領解説』フレーベル館。

森繁哉, 2004,「日本の農業の可能性が見えてきた」『d/SIGN』7, 太田出版, pp.52-60.

森田真也, 2006,「行楽からふるさと観光へ」新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学 1 都市とふるさと』吉川弘文館, pp.184-215.

Schutz, Alfred, 1962, Collected Papers I: The Problem of Social Reality, edited and introduced by Maurice Natanson(Phaenomenologica Vol.11), MartinusNijhoff.,（＝1983, 渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻社会的現実の問題[I]』マルジュ社）.

柴崎正行・若月芳浩編, 2009,『保育内容「環境」』ミネルヴァ書房。

Sobel, David, 1996, Beyond Ecophobia: Reclaiming the Heart in Nature Education, The Orion Society.,（＝2009, 岸由二訳『足もとの自然から始めよう』日経BP社）.

――――― 2008, Childhood and Nature: Design Principles for Educators, Stenhouse Publishers.

上間陽子, 2014,「沖縄の風俗業界で働く女性たちの移行とそのリスク」『日本教育社会学会第66回発表要旨集録』, pp.490-491.

Uexküll, Jacob von / Kriszat, Georg, [1934]1970, Streifzügedurch die Umwelten von Tieren und Menschen, S. Fischer.,（＝2005, 日高敏隆・羽田節子訳『生物から見た世界』岩波書店）.

山崎裕, 2007,「幼児の野外遊び場としての『非整備自然空間』の提案とその環境要素」『こども芸術教育研究』2, pp.137-151.

柳田國男, 1969,『定本柳田國男集第十六巻』〔新装版〕筑摩書房。

吉本哲郎, 2008,『地元学をはじめよう』岩波書店。

（受稿 平成26年12月８日，受理 平成26年12月15日）